今般改版にあたっては、更に吟味されたであろうと思われる元和九年の刊記ある片仮名整板本を照合し、前版の不備を正し、詞章を増加し、諸文献を参照して頭註を増補し、挿絵写真と図版を補って読解と鑑賞の便を計りました。

なお、各章の終りに作品成立当時の史書に散見する、参考資料の大要を添えました。傍系挿話的なものもありますが、当時の史実を素材として、作者がいかに純文学に創作美化せしめたかを窺う一助とも考えたからであります。

本改版にあたっては、佐伯梅友先生の御蔵書を恩借し、また信州大学教授細野哲雄氏の助言を頂き、服部有恒画伯の御揮毫と、大国魂神社猿渡社司より特に写真を恩借しました。併せて謝意を表します。

昭和二十八年八月

武蔵野文学会

目次

はしがき……三
挿絵・図版目次……六
解説……七
○源平略系図……九
○祇園精舎……一〇
○殿上の闇討……一一
○鱸……一八
○妓王……二一
○鹿の谷……二六
○西光が斬られ……四一
○赦文……四九
○足摺……五一
○信連合戦……五六
○競……六三
○新院崩御……七一
○紅葉……七三
○小督……七八
○入道逝去……八六
○維盛の都落……九二
○忠度の都落……九六
○一門の都落……九九
○福原落……一〇六
○忠度最後……一一〇
○敦盛……一一三
○海道下り……一二六
○千手……一三三
○横笛……一三一
○高野の巻……一三五
○維盛の出家……一三六
○先帝の入水……一四一
○小原御幸……一四六
○御往生……一五三
附録
建礼門院右京大夫集抄……一五八
閑居の友（下巻抄）……一五八
平家略年表……一六一
◇表紙地模様唐草…厳島神社蔵平家納経見返の一部（模本）
◇琵琶……仁和寺御室蔵平経正所愛「青山」
（平家物語巻第七…夏山の濃の緑の木の間より、有明の月の出でけるを、撥面に書かれたりける故にとも、青山とは名づけけれ）。

挿絵・図版目次

沙羅の花……巻頭扉
底本影印……扉裏
鳥羽院御像……三
清涼殿々上間……〃
同　下侍附近……〃
紫宸殿図……〃
家貞殿上の小庭に候す……一四
東帯姿……一五
箙　巻……〃
狩　衣……〃
腹　巻……〃
弦　巻……〃
木賊（トクサ）……〃
椋（ムク）……〃
五節の舞……〃
御隨身姿……一九
鱸清盛の船に入る……二〇
鱸……〃
西八條邸図……二三
白拍子……二三
妓　王……二四
妓　女……〃
清海入道……二六
同　筆蹟……〃
刀自（トザ）……二七
女　車……二八
佛……二九
妓王・妓女の墓……三〇
梶（カザ）……三二
彌陀の本願……三三
佛、妓王を訪う……三三
被衣（カツキ）姿……三四
鹿ヶ谷図……三六
平治の成親……三八
猿　樂……三九
弓　袋……四一
直　垂……〃
寢殿作……四三
袴の股立……四三
網代車……四四
六波羅図……四五
鬼界島図……五〇
足　摺……五四
領巾振山図……〃
市女姿……五七
高倉宮……五八
信連奮戰……六〇
衛府の太刀……〃
還城樂……六六
寺法師……六八
競武裝……六九
楯（持楯）……八〇
高倉天皇笛時繪……七三
櫨・楓……七四
高倉帝硯箱……七五
折　戸……七九
嵯峨大念佛……八〇
法輪寺……八一
小督琴模様……八三
仲国嵯峨の庵を訪う……八三
はれ馬障子……八四
小督の塔……八五
入道悶死……八七
盧遮那佛……八九
焦熱地獄……〃
閻王の庁……〃
草　摺……九四
水つき（馬の）……九五
忠度俊成を訪う……九七
袖印（鎧）……九九
一門の都落……一〇一
鳳　輦……一〇二
福原内裏跡……〃
重盛・貞能の墓……一〇四
契丹・高麗国図……一〇七
鏑（クツバミ）……一〇八
都鳥・十王図……一〇九
沃懸地の鞍……一一〇
鐙・籠（エビラ）……一一一
鎧直垂……一一三
金覆輪の鞍……〃
金作の太刀……一一三
鍬形打たる兜……〃
連錢葦毛馬……〃
敦盛木像……一一五
高倉帝硯箱……〃
熊谷直実像……〃
敦盛墓……一一六
中世東海道図……一一七
逢坂関……一一八
比良高嶺……一一八
瀬田長橋……〃
八　橋……一二二
不破関……〃
清見関……〃
足柄関・足柄明神……〃
頼朝像と花押……一二四
目結染……一二六
牛挿盥……〃
北野天神……一二七
五常樂……一二八
元　服……一二七
小烏の太刀……一二九
靱……一三八
みづら（髪）……一四三
壇ノ浦……一四四
平家一門の墓……〃
唐　櫃……一四五
忍草・忘草……一四七
正木葛・青つづら……〃
三尊佛……一五〇
治部卿局・帥典侍……一四五
大納言典侍……一五一
後白河法皇像……一五六
建禮門院像……〃
寂光院本堂……〃
同　山門……〃
青山の琵琶……表紙

解　説

鎌倉時代の戦記物語には、平家物語を中心として、先に保元・平治物語（各三巻）があり、後に太平記（四十巻）があり、また平家物語の一異本と見られる源平盛衰記（四十八巻）がある。これらは何れも戦乱を主材とする点で共通性を有するものであるが、中でもこの平家物語は、琵琶法師によって平曲として謡い語られ、愛誦伝承され、江戸時代に入っては、読みものたる物語文学として大いに国民的普及をもたらした。

巻数は十二巻、その伝本は非常に多い、之れは平曲として伝授流転せられたことによって生じたと考えられるが、その差は大同小異である。普通一般に行われたと推せられ、現在も多く行われるものは、その奥書に「一方撿校衆以数人之吟味改字云々…」とあるもので、十二巻のほか灌頂の巻を添えている。即ち本書の底本がそれで、流布本と称されるものである。

成立年代は諸説があり、その原型は建久以降承久以前、流布本は仁治以降建長四年頃までと推定され、また作者は未詳であるが、徒然草二二六段に、信濃前司行長が作り、琵琶法師生仏に語らしめたことが見える。但し、この記事の信拠を立証すべき資料は未だ見当らない。

内容は一地方の地下貴族であった平氏が、たまたま風雲に乗じ忽ちその勢力を伸張し、無上の栄冠を極めたが、敵方である源氏との激しい闘争によって、また忽ち滅亡する一門の盛衰を、当時の史実を素材として創作した文芸作品で、和漢混淆を基調とする優れた文体で記述されている。その主想は「盛者は必ず衰え、諸行はつねに無常」であるという仏教思想が当時の時代思想として全巻に湛えている。

○祇園精舎

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の埋を顯す。驕れる者久しからず、たゞ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝を問らふに、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の祿山、これ等は皆舊主先皇の政にも從はず、樂しみを極め、諫をも思ひ入れず、天下の亂れん事をも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにし者どもなり。近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これ等は驕れる事も猛き心も、皆執々なりしかども、ま近くは、六波羅の入道前の太政大臣平の朝臣清盛公と申し、人の有樣、傳へ承るこそ、心も言も及ばれね。

その先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原の親王九代の後胤、讃岐の守正盛が孫、刑部卿忠盛の朝臣の嫡男なり。かの親王の御子、高視王無官無位にして失せ給ひぬ。その御子高望王の時、初めて平の姓を賜はつて、上總介になり給ひしより以來、忽ちに王氏を出でて人臣に連なる。その子鎮守府の將軍良茂、後には國香と改む。國香より正盛に至るまで六代は、諸國の受領たりしかども、殿上の仙籍をば未だ許されず。

（卷第一）

(一)祇樹給孤獨園林に須達長者が佛及び比丘僧のために造った寺。精舎は修行者の居所。往生要集「祇園寺無常堂の四角に頗梨鐘あり、鐘の音の中に、また此の偈を說く」と。(二)涅槃經の偈に「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂」と、即ち因緣によって生じ三世を遷流す。切万物は生滅流轉して暫くも常住しないこと。(三)昔印度に四方に各二林雙生した樹の名。（章末參考參照）(四)仁經護國品、四非常偈に「盛者必衰」と。(五)秦始皇の臣。二世皇帝を擁立し權を專にし、後漢の帝の後宮に入れた。政を專にし位を奪った。成帝の父。政を專にし、後漢に亡された。(六)梁の武帝の臣、阿諛寵を恣にし、遂に梁を滅した。(七)唐玄宗の寵臣。天宝十四年（七五五）叛し、間もなく殺された。(八)高望王の三男平良將の嫡子。東國に下り下總の國相馬（いまいう）に居城して反亂を起した。朱雀天皇（第六十一代）の天慶三年（九四〇）二月藤原忠文、平貞盛、藤原秀郷のために討たれた。(九)前帝成帝の後宮に入れた。天慶二年十二月乱を起し同四年六月橘遠保小野好古等に討たれた。(十)源義家の二男対馬守。鎮西横行の暴虐により出雲國で鳥羽天皇の天仁元年（一一〇八）正月因幡守平正盛に討たれた。(十一)源義家の二男陸奥守。平清盛に誅せられた。平治の亂（一一五九）に朝敵となり遠流に處せられた。(十二)源義朝の子。平清盛に誅せられた。(十三)平家一門の住所。（四五頁註參照）(十四)平治元年（一一五九）二月源義朝と共に亂を起し、平清盛に敗れ、妻子を持ち在家する者。(十五)頁註參照）(十六)桓武天皇（第五十代）の一四頁註參照。(十七)式部卿の宮。唐名李部王（リホウオウ）。天長七年（八三〇）常陸大守兼式部卿、壹八年一品、親王の最高位。(十八)式部省の長官で親王の任。式部卿の宮。御年六十八。

(一)（九頁系図參照）。(二)訟訴を裁断する刑部省の長官。長承元年（一一三二）三月土木の功による。朝臣は四・五位殿上人の敬称（一七頁註參照）。(三)寛平元年（八八九）五月平姓を賜わる。(四)天長三年（八二六）九月上總・常陸・上野三国の国守を太守と改め親王の任国とし国司代を介といった。(四)陸奥国多賀城（いま宮城県宮城郡）に置かれ、のち延暦二十一年（八〇二）胆沢城及平泉に移った軍団所で陸奥・出羽両国の北夷を鎮撫し政を執った。將軍は長官で大將軍とも称した。(六)常陸の大掾となった。承平五年（九三五）二月蜂の將門に殺された。(七)国司の各地方に赴任して国務を執るもの。即ち国守。但し国守遙任又は兼任の時は介掾ともいう場合もある。(八)清涼殿殿上の間。(九)殿上の間に昇ることを聽されると殿上の簡（ミフダ）に其の名が記される。これを「フダニツク」又は「仙籍をゆるされる」という。主として四位五位の人であるが、藏人は六位でも聽された。

參考○沙羅―印度、特にヒマラヤ山麓に大なる森林帶を成し、十余丈に達する龍腦香科の喬木。尺余の葉は互生し、五六月頃黄色一寸許りの五弁の花を群開、花後四裂して二寸余五個の翅ある（もみぢの実に似る）果を結ぶ。原地にてはチーク材に次ぐ有用なる材とし、ガンヂス河（恒河）にては船舶を造り、また建築用に重用されている。

○殿上の闇討

然るに忠盛未だ備前の守たりし時、鳥羽の院の御願、得長壽院を造進して、三十三間の御堂を建て、一千一體の御佛を据ゑ奉らる。供養は天承元年三月十三

(一)大治四年（一一二九）備前守。長承元年三月昇殿。仁平三年（一一五三）一月卒年五十八。家集一卷があり、歌は多く金葉集以下の勅撰集に入る。(二)第七十四代。堀川天皇の第一皇子。崇德・近衛・後白河三帝の御父。保元元年（一一五六）七月二日崩御。御年五十四。(三)京都蓮華王院。（三十三間堂）の南の寺。元暦二年七月九日の大地震に顚倒して蓮華王院に合併したという。(四)崇德天皇御代（一一三一）史実には長承元年。導師は天台座主忠尊大僧都。